

日本古典文學大系 90

假名草子集

前田金五郎
森田武校注

岩波書店刊行

假名草子集

日本古典文学大系 90

昭和 40 年 5 月 6 日 第 1 刷 発行

定価 1000 円



校 注 者

まえ
前
もり
森

だ
田

きん
金
た
田

ご
五

ろう
郎
たけし
武

発 行 者

東京都千代田区神田一ツ橋 2 / 3

岩 波 雄 二 郎

印 刷 者

長 野 市 中 御 所 2 / 3 0

田 中 忠

発 行 所

東京都千代田区
神田一ツ橋 2 / 3 株式会社

岩 波 書 店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

語物勢仁

Handwritten text in Urdu script, likely a continuation of the letter or a separate note.

竹齋

۱۰۰
 ۱۰۱
 ۱۰۲
 ۱۰۳
 ۱۰۴
 ۱۰۵
 ۱۰۶
 ۱۰۷
 ۱۰۸
 ۱۰۹
 ۱۱۰
 ۱۱۱
 ۱۱۲
 ۱۱۳
 ۱۱۴
 ۱۱۵
 ۱۱۶
 ۱۱۷
 ۱۱۸
 ۱۱۹
 ۱۲۰
 ۱۲۱
 ۱۲۲
 ۱۲۳
 ۱۲۴
 ۱۲۵
 ۱۲۶
 ۱۲۷
 ۱۲۸
 ۱۲۹
 ۱۳۰
 ۱۳۱
 ۱۳۲
 ۱۳۳
 ۱۳۴
 ۱۳۵
 ۱۳۶
 ۱۳۷
 ۱۳۸
 ۱۳۹
 ۱۴۰
 ۱۴۱
 ۱۴۲
 ۱۴۳
 ۱۴۴
 ۱۴۵
 ۱۴۶
 ۱۴۷
 ۱۴۸
 ۱۴۹
 ۱۵۰
 ۱۵۱
 ۱۵۲
 ۱۵۳
 ۱۵۴
 ۱۵۵
 ۱۵۶
 ۱۵۷
 ۱۵۸
 ۱۵۹
 ۱۶۰
 ۱۶۱
 ۱۶۲
 ۱۶۳
 ۱۶۴
 ۱۶۵
 ۱۶۶
 ۱۶۷
 ۱۶۸
 ۱۶۹
 ۱۷۰
 ۱۷۱
 ۱۷۲
 ۱۷۳
 ۱۷۴
 ۱۷۵
 ۱۷۶
 ۱۷۷
 ۱۷۸
 ۱۷۹
 ۱۸۰
 ۱۸۱
 ۱۸۲
 ۱۸۳
 ۱۸۴
 ۱۸۵
 ۱۸۶
 ۱۸۷
 ۱۸۸
 ۱۸۹
 ۱۹۰
 ۱۹۱
 ۱۹۲
 ۱۹۳
 ۱۹۴
 ۱۹۵
 ۱۹۶
 ۱۹۷
 ۱۹۸
 ۱۹۹
 ۲۰۰
 ۲۰۱
 ۲۰۲
 ۲۰۳
 ۲۰۴
 ۲۰۵
 ۲۰۶
 ۲۰۷
 ۲۰۸
 ۲۰۹
 ۲۱۰
 ۲۱۱
 ۲۱۲
 ۲۱۳
 ۲۱۴
 ۲۱۵
 ۲۱۶
 ۲۱۷
 ۲۱۸
 ۲۱۹
 ۲۲۰
 ۲۲۱
 ۲۲۲
 ۲۲۳
 ۲۲۴
 ۲۲۵
 ۲۲۶
 ۲۲۷
 ۲۲۸
 ۲۲۹
 ۲۳۰
 ۲۳۱
 ۲۳۲
 ۲۳۳
 ۲۳۴
 ۲۳۵
 ۲۳۶
 ۲۳۷
 ۲۳۸
 ۲۳۹
 ۲۴۰
 ۲۴۱
 ۲۴۲
 ۲۴۳
 ۲۴۴
 ۲۴۵
 ۲۴۶
 ۲۴۷
 ۲۴۸
 ۲۴۹
 ۲۵۰
 ۲۵۱
 ۲۵۲
 ۲۵۳
 ۲۵۴
 ۲۵۵
 ۲۵۶
 ۲۵۷
 ۲۵۸
 ۲۵۹
 ۲۶۰
 ۲۶۱
 ۲۶۲
 ۲۶۳
 ۲۶۴
 ۲۶۵
 ۲۶۶
 ۲۶۷
 ۲۶۸
 ۲۶۹
 ۲۷۰
 ۲۷۱
 ۲۷۲
 ۲۷۳
 ۲۷۴
 ۲۷۵
 ۲۷۶
 ۲۷۷
 ۲۷۸
 ۲۷۹
 ۲۸۰
 ۲۸۱
 ۲۸۲
 ۲۸۳
 ۲۸۴
 ۲۸۵
 ۲۸۶
 ۲۸۷
 ۲۸۸
 ۲۸۹
 ۲۹۰
 ۲۹۱
 ۲۹۲
 ۲۹۳
 ۲۹۴
 ۲۹۵
 ۲۹۶
 ۲۹۷
 ۲۹۸
 ۲۹۹
 ۳۰۰
 ۳۰۱
 ۳۰۲
 ۳۰۳
 ۳۰۴
 ۳۰۵
 ۳۰۶
 ۳۰۷
 ۳۰۸
 ۳۰۹
 ۳۱۰
 ۳۱۱
 ۳۱۲
 ۳۱۳
 ۳۱۴
 ۳۱۵
 ۳۱۶
 ۳۱۷
 ۳۱۸
 ۳۱۹
 ۳۲۰
 ۳۲۱
 ۳۲۲
 ۳۲۳
 ۳۲۴
 ۳۲۵
 ۳۲۶
 ۳۲۷
 ۳۲۸
 ۳۲۹
 ۳۳۰
 ۳۳۱
 ۳۳۲
 ۳۳۳
 ۳۳۴
 ۳۳۵
 ۳۳۶
 ۳۳۷
 ۳۳۸
 ۳۳۹
 ۳۴۰
 ۳۴۱
 ۳۴۲
 ۳۴۳
 ۳۴۴
 ۳۴۵
 ۳۴۶
 ۳۴۷
 ۳۴۸
 ۳۴۹
 ۳۵۰
 ۳۵۱
 ۳۵۲
 ۳۵۳
 ۳۵۴
 ۳۵۵
 ۳۵۶
 ۳۵۷
 ۳۵۸
 ۳۵۹
 ۳۶۰
 ۳۶۱
 ۳۶۲
 ۳۶۳
 ۳۶۴
 ۳۶۵
 ۳۶۶
 ۳۶۷
 ۳۶۸
 ۳۶۹
 ۳۷۰
 ۳۷۱
 ۳۷۲
 ۳۷۳
 ۳۷۴
 ۳۷۵
 ۳۷۶
 ۳۷۷
 ۳۷۸
 ۳۷۹
 ۳۸۰
 ۳۸۱
 ۳۸۲
 ۳۸۳
 ۳۸۴
 ۳۸۵
 ۳۸۶
 ۳۸۷
 ۳۸۸
 ۳۸۹
 ۳۹۰
 ۳۹۱
 ۳۹۲
 ۳۹۳
 ۳۹۴
 ۳۹۵
 ۳۹۶
 ۳۹۷
 ۳۹۸
 ۳۹۹
 ۴۰۰
 ۴۰۱
 ۴۰۲
 ۴۰۳
 ۴۰۴
 ۴۰۵
 ۴۰۶
 ۴۰۷
 ۴۰۸
 ۴۰۹
 ۴۱۰
 ۴۱۱
 ۴۱۲
 ۴۱۳
 ۴۱۴
 ۴۱۵
 ۴۱۶
 ۴۱۷
 ۴۱۸
 ۴۱۹
 ۴۲۰
 ۴۲۱
 ۴۲۲
 ۴۲۳
 ۴۲۴
 ۴۲۵
 ۴۲۶
 ۴۲۷
 ۴۲۸
 ۴۲۹
 ۴۳۰
 ۴۳۱
 ۴۳۲
 ۴۳۳
 ۴۳۴
 ۴۳۵
 ۴۳۶
 ۴۳۷
 ۴۳۸
 ۴۳۹
 ۴۴۰
 ۴۴۱
 ۴۴۲
 ۴۴۳
 ۴۴۴
 ۴۴۵
 ۴۴۶
 ۴۴۷
 ۴۴۸
 ۴۴۹
 ۴۵۰
 ۴۵۱
 ۴۵۲
 ۴۵۳
 ۴۵۴
 ۴۵۵
 ۴۵۶
 ۴۵۷
 ۴۵۸
 ۴۵۹
 ۴۶۰
 ۴۶۱
 ۴۶۲
 ۴۶۳
 ۴۶۴
 ۴۶۵
 ۴۶۶
 ۴۶۷
 ۴۶۸
 ۴۶۹
 ۴۷۰
 ۴۷۱

目次

解説	三
凡例	二九
犬枕	三三
恨の介	四九
竹斎	八九
仁勢物語	一六
夫婦宗論物語	三三
浮世物語	二四二

(以上前田金五郎校注)

伊曾保物語……………三五

(森田武校注)

補注……………四七五

解 説

一 仮名草子の名義

仮名草子とは、江戸時代初期、慶長頃から天和頃までの約八十年間に著述刊行された散文文芸を呼ぶ學術用語である。元來仮名草子なる語は、仮名または仮名交りで書いた草子という、表記による命名で、その内容の如何を問わずに、室町時代以降使用されたから(市古貞次氏「仮名草子」の意味)国語と国文学、二十一卷三号、室町時代の御伽草子の後をうけ、天和二年刊の西鶴作「好色一代男」を第一作とする浮世草子へと連なる物語・草子類の総称として用いられるようになって、その包括する作品の範囲については、広狭さまざまな説があるが、今、近世初期の常識を顧みる意味から、従来、頼原・守随・暉峻諸先学のなされた考察(頼原退蔵氏「仮名草子」岩波講座日本文学、暉峻康隆氏「仮名草子」岩波講座日本文学史、守隨齋治氏「仮名」といふことば)日本古典全書「仮名草子集上」付録に従って、当時の「書籍目録」類の分類を参照してみよう。

先ず、「和漢書籍目録」(寛文六年頃刊)の「十七 和書並仮名類」には、年代記・囲碁書・茶道書・刀劍書・料理本・謡本・雛形・判尽し・道中記・武鑑・諸礼集等の実用書を並記した後に(ごく一部はその途中に)、ちんてき問答・廿四孝・盲安杖・万民徳用・麓の草分・念仏草紙・宝物集・夢遊集・儒仏問答・(一休)水鏡・法花利益・廿三問答・心学五倫書・三賢一致書・上下未分語・三部仮名書・一言法談・童蒙先習等の儒仏神三教の俗解・啓蒙書、伊勢参詣記・沢庵順礼鎌倉記・京童・都物語・鎌倉物語等の紀行・地誌類、長者教・鏡草・女訓抄・可笑記・同評判・悔草・他我身之上・身の鏡・堪忍記・不可得物語・孝行物語・目覚草・ひそめ草等の隨筆的教訓書、伊曾保物語・女四書・棠陰比事抄・智恵鑑・見ぬ世の友・宜応文等の翻訳物、咄の本・醒睡笑・笑草・百物語・しかたばなし等の笑話本、糺物語・清

水物語・祇園物語・大仏物語等の三教または二教の教義問答物、仁勢物語の擬物語本、催情記の男色物、吉原心乱抄・吉原鏡・吉原歌仙等の遊女評判記等が記載され、これらの大部分が、今日「假名草子」と見なされているが、同分類には、他に、初学文章の手紙範例集、秋夜長物語・墨染桜・鴉鷺物語・酒茶論・時雨草紙等の御伽草子、かたことの方言書、狂歌集・吾吟我集の狂歌本、三井寺物語・かづらき物語(共に浅井了意作)の縁起物等をも含んでいる。次に、「二十舞并草紙」の部には、初めに舞の本を三十六番列記し、その次に御伽草子を記載した中に、薄雪・うらみの介・夫婦宗論物語・二人比丘尼・七人比丘尼・竹斎物語・上り竹斎・若衆物語・田夫物語・是楽物語・聚楽物語・あだ物語・異国物語等の假名草子が見え、終の部分に、女仁義物語・女式目・野郎虫・大つれづれ・こそぐり草・まさり草・ね物語・難波物語・島原集・いなもの等の假名草子が記されている。この両分類は一見きわめて雑然たる分類で、その分類基準のあいまいさは否定すべくもないが、「假名」が専ら通俗卑近な教化的書類を意味し、「草子」が主として文芸的な作品をさして居り、「その合成語ともいふべき「假名草子」が」「常に通俗卑近を主とする書類を意味しながらも」「純粹な実用的知識のものよりも、少くとも若干文芸的要素を含んだものの名称として用ひられる場合が多かつた」(頼原氏、同上書)ことは推定されるが、反面、この両分類に、純粹な実用書(年代記・算書・武鑑)、三教俗解書、舞の本、御伽草子が並存している事も無視できない。即ち、假名草子は、これらと同類と考えられていたのである。換言すれば、実用書・思想俗解啓蒙書に相通ずる性格を持ち、他方、文芸性の点では、舞の本・御伽草子(この両者が刊本・奈良絵本として一般に流布したのは、その成立した室町時代よりも、むしろ近世初期であつた)と同様に見なされていたという事である。この点に、假名草子の発生とその範囲の問題を解く鍵が潜んでいると思われる。発生の問題は次項に廻して、範囲の点について考えれば、主として「草紙」の部に収められている作品群の如く、小説的読物のみと狭く限る考え方と、「假名類」に収められている作品群にまで範囲を広げる考え方との二派が生じる。小説的読物といつても、どの点までに限るべきか、という根本的問題点が不明瞭であるし、筆者も目下のところ確乎たる判断をつけかねるので、とりあえず便宜的に、広義に範囲を考えて、假名草子の解説を施す事にしたい。

二 仮名草子の発生と展開

政治的には全く失敗であったといわれる、豊太閤の朝鮮征伐も、文化的に見れば、出征将士の将来した銅活字および印刷機具一式が、当時の日本社会に、印刷機・印刷術の普及発達の呼び水となって、出版文化に大きなプラスとなった。古くは文禄二年、後陽成天皇による「古文孝経」印刊を始めとして、慶長二年「錦繡段」「勸学文」、同四年「日本書紀神代卷」「古文孝経」「四書」「職原抄」等、同天皇の慶長勅版、後水尾天皇の元和勅版、徳川家康の伏見版・駿河版、本阿弥光悦と吉田素庵の嵯峨本、或は諸寺や諸侯、または民間出版業者の印行が盛んに行われ、漢籍・仏書・医書・日本古典等が統々と刊行されるようになったのである(川瀬一馬氏「古活字版の研究」参照)。古典の出版の次には、前代の文化産物、謡・舞・御伽草子の刊行が続ぎ、更に当代の述作が続くのは当然の理であろう。それらの中には、今日の我々から見れば、何のために出版したのかも分らぬような刊本が散見する。例えば、小瀬甫庵道喜編集「明意宝鑑」は「内裏御普請帳」に付載され、「政要抄」は「前関白秀吉公御検地帳目録」「朝鮮国御進発之人数帳」と合せて一巻なのである。「明意宝鑑」「政要抄」(いずれも慶長中刊)は、共に、明刊本「新鐫京板正譌音釈提頭大字明心宝鑑正文」(略称、明心宝鑑正文、または明心宝鑑、太倉 綴山 王衡校、書林 弼廷 陳氏梓。寛永八年刊和刻本あり)なる訓言集を種本にし、それに「論語」等の本文および注を加えて編集したもので、「内裏御普請帳」等とは全然無関係なのであるが、これらを抱き合わせた点に、出版原稿の供給不足が考えられるであろう。或は、こんな無味乾燥な記事さえも、出版されれば歓迎されたほど、刊本に対する需要が強かったとも推定される。(なお、笑話本「戲言養気集」巻末にも、「前関白秀吉公御検地帳」「朝鮮国御進発之人数帳」が見え、その数値が大同小異、人数帳の跋文が殆んど同じであるのは、「戲言養気集」の作者の推定の手掛り、或は、これらの記事付載の必然性等の判断の資料となると思われる。)

以上の如く、印刷術の発達は、原稿を必要とした事から、輸入の漢籍・朝鮮本、在来の日本古典・漢籍・仏書等の外、新著作の需要が起ったので、従来なら写本のままで終ったものが、刊本として流布したのであるが、その中に仮名草子

の原稿もあったのである。それらの述作者のうち、最も古くは、宮廷を中心とする公家文化圏の人々、將軍・諸侯の新貴族、およびこれらに出入りした特権的門閥商人または御伽衆・御咄衆(側近の家臣や出入りの医師・僧侶・連歌師等の文化人)等が、その作者であった。二、三例を挙げれば、織田信長・豊臣秀吉に仕えた御伽衆太田牛一(作「天正記」)「信長記」を再輯して、甫庵版「信長記」「太閤記」を作った小瀬甫庵は、豊臣秀次・堀尾吉晴・前田利常に歴任した御伽衆であり、「犬枕」の編者秦宗巴は、豊臣秀次・徳川家康に歴任した侍医で、宮中にも出入りし、特に陽明御所(近衛信尹邸)の御伽衆の一人であった。また、「尤之双紙」は、八条宮無品中務卿智忠親王邸出入りの連歌・俳諧師斎藤徳元が、同親王の御伽の料に奉り、その加筆を得たもの。更に、京都所司代板倉重宗・重郷父子に献するために、「醒睡笑」を著作した安楽庵策伝は、京都誓願寺の住僧、茶道と話術で秀吉や重宗の愛顧を受けた御伽衆であり、その「策伝和尚送答控」を見れば、公家・大名・豪商・儒者・歌人・狂歌師・俳諧師と、交際範囲の広さに驚かされる文化人。磯田道治は延寿院曲直瀬玄朔に師事した医者で、その出入りしていた諸侯の伽に供した著作が「竹斎」と推定される、等々である。

さて、これらの著者の稿本は、初めは写本、時には絵巻物の形態で回覧された事は、「犬まくら」「竹斎東下」「くずの恨の介」「仁勢物語」「長者教」「世中に」「仮枕」等の諸写本や、絵巻物「露殿物語」の伝存で確証されるが、これら諸本のうち、幸運にも小部数活字印刷されたものが、私家版として、同好のサークルに配本されたのである。いわゆる古活字版「戯言養気集」「きのふはけふの物語」「犬枕」「うらみのすけ」「薄雪物語」「竹斎」等は、それらのうち、今日まで伝わった貴重本である。(反面、不幸にして上梓の機会を得なかった稿本は、或は稿本のままで伝存し、或は失なわれてしまったのであろうが、寛永以後の整版印刷時代に大部分は刊行されたのではあるまいか。仮名草子に成稿と刊年とのずれの多いのは、それを物語っているようにも思われる。)

ついで、活字印刷は大量出版に適しない事から、寛永以後は、整版印刷が盛んになった。この印刷技術の転換は、商業ベースによる出版事業を可能にし、従来の貴族好みの道楽出版から、不特定多数の読者即ち一般大衆を買手とする商品生産者としての「本屋」の出現を招来した。本屋は多数の人が買ってくれる本を刊行しなければ営業できないのであ

る。従つて、本の内容も大衆の娯楽・教養・実用向きに変化し、作者も従来の貴族（公家・武家）の御伽衆から、民間の浪人学者・学問僧・連歌師・俳諧師等、庶民と接触し、その精神・感覚・知識等によく通じたインテリに交代していった。今日まで明らかになった作者は、徳川の旗本で大阪の役に出陣、後、四十二歳で出家して仁王座禪を唱道した鈴木正三（念仏草紙〔万治頃刊〕・二人比丘尼〔正保―承応頃刊〕・因果物語〔寛文元年刊〕等の作者）、日向鉄肥（^{てつひ}）の家中に生れ、後、今治藩の家老となった江島長左衛門為信、俳号松風軒山水（身の鏡〔万治二年刊〕・理非鑑〔寛文四年刊〕の作者）（松田修氏「日州漂泊野人の生涯」日本近世文学の成立所収参照）、最上浪人で、湯村式部とも斎藤意伝とも称したと伝える如偶子（^{にようし}）（可笑記〔寛永十九年刊〕・百八町記〔寛文四年刊〕の著者）、小田原の北条氏政に仕え、主家滅亡後江戸に出て、天海僧正に帰依した三浦浄心（そむろ物語）「北条五代記（いずれも寛永十八年刊）の作者」、紀州の徳川頼宣の家老を勤め、承応元年八十歳で没した三浦長門守平為春（あだ物語〔寛永十七年刊〕の著者）（浜田康三郎氏「三浦為春」参照）、浪人出身で、後真宗の僧侶となった浅井了意（仮名草子最大最高の作者。次項「浮世物語」解説参照）、越後出身の浪人曾我休自（為愚癡物語〔寛文二年刊〕の作者）、丹波桑田郡馬路村出身の浪人で、上京して医学を修め、俳諧師安原貞室に師事し、広島に移住して後半生を終った中川喜雲（京童〔万治元年刊〕・私可多咄〔万治二年刊〕・京童跡追〔寛文七年刊〕の作者）（松田修氏「中川喜雲・ある名所記作家の場合」前掲書所収参照）、京都の朱子学者で、承応二年、後光明天皇に、中庸・易経集注伝義を御進講申し上げた朝山意林庵（清水物語〔寛永十五年刊〕・続清水物語〔寛文六―十年刊〕の作者）、橋軒散人の筆名を以て、児女教訓のために漢籍諺解本を編述した、儒医辻原元甫（智恵鑑〔万治三年刊〕・女四書〔明暦二年刊〕・倭小学）「見ぬ世の友〔共に明暦四年刊〕の著者」、伊勢山田の商家出身で、和歌・国学に通じ、北村季吟門の俳人であった山岡元隣（他我身之上〔明暦三年刊〕・小厄（^{こさか}）〔寛文十二年刊〕・「百物語評判〔貞享三年刊〕の作者」、貞門の大家で、歌学者としても「湖月抄」「春曙抄」を始め、多くの古典注釈書を著わした北村季吟（仮名列女伝〔明暦元年刊〕・女郎花物語〔万治四年刊〕の著者）、松永貞徳門下の有名な俳人で、雛人形の細工を家業とし、書画文章にも秀でていた野々口立圃（十帖源氏〔寛文元年刊〕・「おさな源氏〔同十年刊〕の作者）、萩田安

静門下の貞門俳人富尾似船〔石山寺入相鐘〕〔延宝四年刊〕・〔御伽物語〕〔延宝六年刊〕の著者、三河吉田藩の御用達で、俳号愚侍を名乗った貞門俳人小野久四郎〔ねごと草〕〔寛文二年刊〕の著者〔岸得藏氏「ねごと草」と小野愚侍」国語国文三十九年十二月号参照〕、肥前蓮池出身の鈴木正三門の僧釈恵中〔海上物語〕〔寛文六年刊〕の作者、酒井河内守の侍医で、無類の酒豪であった茨木春朔〔水鳥記〕〔寛文二年刊〕の著者等であるが、これらの人々の中では、武家の浪人が多いことに注目される。元和偃武後、幕府の諸侯統制過程に生じた諸大名の取潰しにより、大量の浪人が発生したが、それらのうち、仕官の望みが叶えられず、または商賈・農業に転業し得なかった者の中で、学問・文芸・述作・舌耕を渡世の道とした人々もあった。以上の仮名草子作者は、これらの人々の中から発生したもので、中には自己の人生経験から生れた烈しい政道・世相批判をなした「可笑記」の作者のような人もいたが、多くは、処世の道または倫理・教訓、或は依るべき思想・宗教を通俗平易に説くのを常とした。

以上、印刷技術・営利出版の発展と著作者の輩出の外に、仮名草子の発生と展開の原因としては、読者側の事情も合せ考えるべきであろう。大阪夏の陣を最後として、戦争から平和へと天下は移り変わり、教養・知識・実践道德の修得を希望した士農工商の庶民は、講談・談義・夜咄でもその渴をいやしたが、一般的には仮名書で身につけたであろう。前引書籍目録の「九 外典」の項に列記された、「三徳抄」「春鑑抄」「寸鉄録」「童観鈔」「卮言鈔」は、いずれも林羅山作仮名抄であるが、これらの書名が寛文十年刊同上書には、「仮名和書」の部に仮名草子類と同居しているのは示唆的である。即ち、仮名抄をもう一步通俗平易にすれば仮名草子となる、或は仮名抄は教訓物と言われる仮名草子と同一視されていたと推定されるからである。儒教の実践道德、或は処世訓は仮名草子の主要な題材であるが、その一証例を次に記して置こう。「明心宝鑑」が、小瀬道喜により、その著「明意宝鑑」「政要抄」に利用されている事は前に記したが、寛文六年刊の羅山著「童蒙抄」〔三卷〕には二十五カ所、野間三竹著「北溪含毫」〔三冊、寛文六年刊〕には三カ所引用され、また、内閣文庫には、明刊本と和刻本二部、肥前島原松平文庫には、清刊本と和刻本二部、京都大学図書館谷村文庫には、朝鮮刊本の抄本「明心宝鑑抄」が所蔵されている点から、同書は近世初期かなり流布した儒教的教訓書と思われる

が、浅井了意の代表作「浮世物語」にも十数カ所に亘って引用されているのである。なお、寛文十年刊書籍目録記載書籍総数三千八百六十六部のうち、学問教養書(大多数は儒書)八百七十七部(全体の二二・八パーセント)に對して、千六百七十七部(四十四・三パーセント)の絶對多数を仏書が占める事を見てもわかるように、仏教思想の俗解が仮名草子の一源流となつた事は言うまでもない(今田洋三氏「元禄享保期における出版資本の形成とその歴史的意義について」ヒストリア、十九号)。また太平ムードに包まれ、世相の安定、産業經濟の發展、近世都市の成立と成長、交通の進歩等の諸現象が見られ、庶民の生活の向上と共に趣味・娯樂の追求が生じた。これらに對應する著述として、名所記・道中記・算書・和歌・狂歌・連歌・俳諧等の韻文学書、立花・茶湯・料理・謡・糸竹等の趣味の書、更には、快樂の對象たる遊女・役者の評判記等が刊行されたが、これらの刊本の一部は仮名草子に数えられるのは周知の事實である。

以上の諸事情から發生・展開した仮名草子がいかに歡迎されたかは、古活字版が整版に改版され、また、その多くが再版・三版と版を重ねている事からも察せられるが、その出版元が殆んど京都の本屋に限られているのは(一部は江戸で改版)、次期の浮世草子が大阪の本屋を主力とするのに好對照をなし、ここに仮名草子を生み育てた文化的・地域的特殊性がうかがえるようである。

三 仮名草子の分類

仮名草子の主要な特質としては、教訓性・実用性・娯樂性等が考えられ、仮名草子の一作品について見ても、これらの性質が二重三重にオーバーラップしている場合が多いので、その分類もすっきりと割り切れず、従来、藤岡作太郎氏(近代小説史)、額原退藏氏、暉峻康隆氏(共に前掲書)、野田寿雄氏(「仮名草子の世界」)「仮名草子の流行色」共に近世小説史論考所収等により、種々の分類が試みられている。今ここでは主として野田寿雄氏の分類に従つて、簡単な説明と主要な作品名とを記すことにする。

1 教義教訓的なもの

三教の立場から、民衆教化を目的として著され、その中には教義を問答体に述べ、或は随筆的に吐露し、または特に、女子に訓戒をたれたもの、勧善懲悪用の説話を集めたもの、などがある。

(イ) 教義問答的なもの

長者教(寛永四年刊) 七人比丘尼(寛永十二年刊) 清水物語 大仏物語(寛永十九年刊) 祇園物語(寛永末年刊) 夫婦宗論物語
草萊物語(慶安元年刊) 不可得物語(同年刊) 糺物語(承応三年刊) 阿弥陀裸物語(明暦二年刊) 二人比丘尼 見ぬ京物語(万治二年刊) 念仏草紙 妙正物語(寛文二年刊) 百八町記 海上物語 何物語(寛文七年刊)

(ロ) 随筆的なもの

可笑記 ひそめ草(正保二年刊) 悔草(正保四年刊) めざまし草(慶安二年刊) いな物(明暦二年刊) 他我身之上 身の鏡 可笑記評判(万治三年刊) 孝行物語(同年刊) 為愚癡物語 理非鑑 小扨 にぎはひ草(佐野紹益作、天和二年刊)

(ハ) 女訓的なもの

女訓抄(寛永十四年刊) 仮名列女伝 女仁義物語(万治二年刊) 女郎花物語 本朝女鑑(寛文元年刊) 賢女物語(寛文九年刊) 名女物語(寛文十年刊) 名女情比(延宝九年刊) 女五経(同年刊)

(ニ) 説話集的なもの

堪忍記(万治二年刊) 智恵鑑 因果物語 似我蜂物語(寛文元年刊) 大倭二十四孝(寛文五年刊) 理窟物語(苗村丈伯作、寛文七年刊)

2 娯楽的なもの

娯楽本位に記述された作品群をいい、御伽草子風の構成に当代の題材をはめこんだ物語や、笑話や怪異談などを集めたもの、或は翻訳・ダイジェスト物、または擬物語(パロディ)、更には事物の起原・地理の解説物などがある。

(イ) 中世物語的なもの

恨の介 薄雪物語(慶長末刊) あだ物語 薄雲恋物語(万治二年刊) 是楽物語(万治年間刊) ねごと草(寛文二年刊)
(ロ) 説話集的なもの

戲言養気集(元和頃刊) きのふはけふの物語(同上刊) 醒睡笑(寛永年間刊) 百物語(万治二年刊) 私可多咄 一休ばなし(寛文八年刊) 一休閑東咄(寛文十二年刊) 狂歌咄(同年刊) 曾呂利物語(寛文十年以前刊) 御伽物語 杉楊枝(延宝八年刊) 囃物語(同上刊) 奇異雜談集(貞享四年刊) 二休咄(貞享五年刊) 狗張子(元禄五年刊)

(イ) 翻訳・ダイジェスト物

伊曾保物語(慶長、元和頃刊) 棠陰比事物語(慶安二年刊) 見ぬ夜の友 孝行物語 十帖源氏 戒殺物語(寛文四年刊) 御伽婢子(寛文六年刊) 釈迦八相物語(同上刊) 三綱行実図(浅井了意作、寛文十年以前刊) おさな源氏(寛文十年刊) 怪談全書(元禄十一年刊)

(ニ) 擬物語

犬枕 尤之双紙 仁勢物語 犬徒然(承応二年刊)

(ホ) 事物解説物

宜応文物語(寛永頃刊) 上下未分語(正保四年刊) 異国物語(万治元年刊) よだれかけ(寛文五年刊) 枯杭集(同八年刊) 由来

物語(小亀益英作、同九年刊)

3 実用本位のもの

軍記・実録・名所記等の見聞記風のもの、遊所案内を目的とした評判記的なものと、男色物・艶書文範などがある。

(イ) 見聞記的なもの

大坂物語(慶長二十年刊) 竹斎 太閤記(寛永三年跋) 信長記(元和、寛永頃刊) 吉利支丹御対治物語(寛永十六年刊) 北条五代記 そぞろ物語 あづま物語(寛永十九年刊) 色音論(同二十年刊) 聚楽物語(同年刊) 薬師通夜物語(同年刊) 島原記(慶安二年刊) 武者物語(承応三年刊) 京童 東海道名所記(万治二年刊) 鎌倉物語(同年刊) 武蔵鍛了意作、万治四年刊 江戸名所記(寛文二年刊) 水鳥記 かなめ石了意作、寛文二、三年頃刊 鬼利至端破却論伝了意作、同三、四年頃刊 浮世物語 南都名所集(延宝三年刊) 石山寺入相鐘 河内国名所鑑(延宝七年刊) 元のもくあみ物語(延宝八年刊)

(ロ) 評判記的なもの

露殿物語(寛永初年成) 桃原集(明暦元年刊) 難波物語(同年刊) 寝物語(同二年刊) 美夜古物語(同年刊) 満散利久佐(同年刊) 野郎虫(万治二年刊) 高屏風くだ物語(万治三年刊) 吉原かがみ(同年刊) 剝野郎(寛文二年刊) 吉原すずめ(寛文七年刊) 吉原こまさらい(寛文八年頃刊) ぬれほとけ(寛文十一年刊) 垣下徒然草(同年刊) 野郎仁勢物語(寛文年間刊) 吉原失墜(延宝二年刊) たきつけ・もえくひ・けしずみ(延宝五年刊) 難波鉦(延宝八年刊) 都風俗鑑(天和元年刊) 古今若女郎衆序(同年間)

(イ) 男色物

心友記(寛永二十年刊) 催情記(寛永頃刊) 田夫物語(寛永頃刊) 衆道綱目(寛文十年刊) 色物語(寛文年間刊)

(ニ) 艶書文範

堀河院艶書合(万治二年刊) 詞花懸露集(寛文元年刊) 錦木(同年刊) 小夜衣(天和三年刊)

以上の各ジャンルの作品群を、年代順に読み比べれば、仮名草子の各ジャンル内での変化・発展がおのずから感得せられ、また、各ジャンルの作品の刊年を調査する事によって、各ジャンルの流行・盛衰の形勢が的確に把握されるのであるが、これらの点については、「糺物語」「妙正物語」等で法華宗を称揚しているのは、当時、京都の町人に法華信者が多く、特に本阿弥光悦等文化エリートが信者であった事実と如何なる関係を有するのか、或は、近世初期、明代の性理の学として輸入された朱子学およびその文献「羅山先生年譜」上、慶長九年、羅山二十二歳の条の「既読書目四百四十余部」は一見本は、具体的には仮名草子にどのように影響しているのか(例えば、朝鮮本「童蒙先習」を借用して、小瀬道喜は「物は尽し」の著作の書名とした、更に広くは、当代の和歌・狂歌・連歌・俳諧・漢詩文等文芸の世界との交渉、または絵画・彫刻等の美術界、歌謡・演劇等の芸能界の発達・変遷等の比較対照等の諸問題の解明と共に、後の機会に俟つ事にしよう。

(以上、前田金五郎稿)

以下、本書に収録した作品の各々について、その概略を述べる。なお、「犬枕」から「浮世物語」までの六篇の「諸本と底本」については、紙数の関係で、各作品の扉裏に収めた。

犬 枕

〔作者〕 本書中に何の記載も無いが、秦宗巴が著者なる事は、川瀬一馬氏が、つとに、「当代記」巻四、慶長十二年十二月十四日宗巴死去の条の「是犬枕双紙作者也」、および「慶長日記」巻三の大同小異の同条の文により、明らかにされた所である（徒然草寿命院抄放）慶長九年版複製本解説。宗巴（五〇）「△△」の字は徳岩、立安と号し、天文十九年二月十五日、丹波朱木^{（註）}の城に生れた。父は善秀と言ひ、秦人徐福の遠裔と伝える。初め吉田宗桂の門に入り医を学び、後、曲直瀬道三正盛に従学した。天正十五年、豊臣秀次の侍医となり、同十九年、法印に叙され寿命院の称号を賜った。慶長五年、徳川家康に招かれ仕えた。博学にして蔵書家として知られたが、慶長十二年、五十八歳で病没。著書に、「素問註抄」「医学的要方」「本草序例抄」「参伍的方」「炮炙詳鑑」等の医書、および「徒然草抄」、香書「一炷煙」等がある。

〔成立〕 本書には刊記が無いが、川瀬一馬氏の鑑定によれば、慶長十一年刊の謄本と同種の活字を使用している慶長古活字版と認められ、従つて慶長十一年頃の板本と推定される（杉浦正一郎氏「犬枕」に就いて）国語国文、八巻四号）。

〔内容〕 斎徳徳元作「尤之双紙」（寛永九年刊）序文に、「慶び長き年の頃か」とよ、これかれ集りて、かの清少納言が枕草子を真似びて書きたる物あり。その名を犬枕と言へるなり。此の二枕は、足引の大和歌の六つの種を表はし、末の世の人の例しとなるべき事を願ひ、言葉素直にして、品巧み有りて心妙なり」と記すように、「枕草子」の「物は尽し」に擬して、七十三項目の物は尽しの短文と、十九首の物は尽しの狂歌を所収。これらのうち、同じ頃の物は尽しの短文を集めた諸本、「世中に」（写本、大本一冊、作者未詳、慶長七年五月二十五日筆、九州大学国文学研究室蔵）、「仮枕」（写本、大本二冊、作者未詳、慶長頃作か、松平文庫蔵）、「童蒙先習」（刊本、大本二冊、小瀬道喜著、慶長十七年跋、寛永頃刊か）、「尤之双紙」（大本二冊）に、「犬枕」と同文が見えるのは、暗合か、剽窃・模倣か等、その相互関係は将来の研究課題である。更に、後になると、諸種の遊女評判記、「讃嘲記時之太鼓」（半紙本一冊、寛文七年刊）、「吉原よぶこ鳥」（半紙本一冊、寛文八年刊）、「吉原袖かぐみ」（小本一冊、延宝初年刊）、「けしずみ」（横本一冊、延宝五年刊）、「長崎土産」（半